

第7章 COVID-19 ワクチンの受容を実現する

作成者：福家佑亮¹

本章の概要

最近の調査によれば、COVID-19 ワクチンの接種を望む人の割合は、人口の 60-70%程度で推移している。この割合は、アフリカ系アメリカ人や教育水準が低い人々等、特定の集団で低くなっており、またワクチン忌避の理由も、ワクチンの安全性への懸念など様々である。7章では、ワクチン忌避の複雑でダイナミックな現況についてレビューを行い、COVID-19 ワクチン接種との関連について論じる。また、ワクチン忌避に対処し、承認されたワクチンへの旺盛なワクチン需要を確実なものにするための統合的なフレームワークとして、世界保健機構によって開発されたワクチン接種増加モデル（Increasing Vaccination Model）に焦点を当てたい。

ワクチン忌避の現状

COVID-19 ワクチン接種に関しては、社会的、文化的、法的要因など多様で交錯する要因が現状の背景にある。以下では、最も重要な要因の内いくつかのものに焦点を当てる。

ワクチン忌避は一般的でかつ増加傾向にある

過去 20 年の間に、米国の住民の間では（特に、青少年の両親）、ワクチンの安全性について懸念の声が高まっていると報告されており、その結果として、ワクチンの接種拒否や接種を遅らせるなどの行動が生じている。たとえば、ある研究によれば、全米全土で 10%以上の親が子どもへのワクチン接種を遅らせている、あるいは拒否していると報告されている。また、幼年期の定期接種以外にも、米国の住民の多くは季節性インフルエンザへの予防接種を拒否しており、10 代以上の接種率は集団の健康を守るために十分なレベルを大きく下回っている。世界的にも、ワクチン忌避は、2019 年における世界的な健康に対する 10 個の脅威の内の 1 つにリストアップされている。

組織され、資金力も豊富で、影響ある反ワクチン団体

反ワクチン感情はワクチンと同じぐらい古い歴史を持つが、今日、反ワクチン団体は全米で活発に活動している。近年では、ソーシャル・ネットワークがワクチンに関する意図的な誤情報の主要な発信源となっている。たとえば、2018 年のツイッターにおけるワクチン接種活動に関する研究によれば、ボット (bots) などのいわゆる「内容汚染者 (content polluters)」が、平均的ユーザーよりもワクチン接種活動に関してはるかに多くのつぶやき

¹ 立命館大学非常勤講師

を行い、反ワクチン活動を扇動していた。また、反ワクチン団体は COVID-19 ワクチンについても運動を開始しており、反ワクチン団体の活動へのカウンターに寄与するような、反ワクチン団体の運動と手口についてのより進んだ理解が必要とされている。

医療による搾取と医療不信

タスキギー事件をはじめとする、アフリカ系アメリカ人等の周辺化された人々への医療差別や搾取の歴史は、政府後援の医療研究に対する正当な不信感を助長してきた。実際、複数の調査によれば、アフリカ系アメリカ人およびラテン系アメリカ人の回答者は、COVID-19 ワクチンが利用可能となった場合に、ワクチンを接種しようとする割合が低いことが明らかとなっている。ワクチン接種の恩恵をすべての人に行き渡らせ、すでに存在する不平等の緩和を確実にするためには、このような歴史を認め、周辺化された共同体の間での信頼の再構築を積極的に目指す、それぞれの文化に合わせたアウトリーチ活動等が必要とされるだろう。

COVID-19 ワクチンに固有の問題

ワクチンの製造から承認に至るまでの未曾有のスピード、政治的な目的のためにワクチン開発が高速化しているという懸念、COVID-19 ウイルスに対する政府や保健機関の対応の稚拙さに起因する政府への信頼感の低下など、COVID-19 ワクチン開発をめぐる固有の事情によって、一般的にワクチンに好意的な人々の間でも COVID-19 ワクチンに関する懸念が表明されている。ある研究では、ワクチンを少なくともある程度支持していると答えた人の内 15%が、COVID-19 ワクチンは接種したくないと回答している。以上の事情を考慮すると、COVID-19 ワクチンへの信頼性を他の予防対策と合わせて確保することは重要な課題である。

世界保健機構による作業部会「ワクチン接種促進の行動的及び社会的要因測定」

(Measuring behavioural and social drivers of vaccination: BeSD) によるワクチン接種増加モデル

2018 年、WHO は BeSD と呼ばれる作業部会を招集し、ワクチン接種率低下に対応するためのツール開発を進めた。結果、BeSD は、ワクチン忌避への対応やワクチン接種推進にあたって、需要側の重要要因に統合的なフレームワークを与えるのに有用なワクチン接種増加モデルを発表した²。

動機づけ

ワクチン接種増加モデルの中心にあるのは、ワクチン接種を受けたいという動機づけである。ここでの動機づけとは、意欲や忌避感といった概念で捉えられるものであり、

² ワクチン接種増加モデルの図式化として 192 頁を参照。

「COVID-19 ワクチンが入手可能になったら、どのくらいの確率で接種するか」などの質問によって測定されるものである。動機づけは、ワクチンについて人々が「考え感じること (think and feel)」と社会的プロセスによって決定される。ワクチンについて人々が「考え感じること (think and feel)」とは、ワクチンの安全性について信じていることや公衆衛生への信頼などといったことを意味する。社会的プロセスとは、人間が社会的な動機づけを強く受ける存在であることに着目した概念であり、医療従事者からの助言や友人や家族といった周囲の人々からの評判や情報などの社会環境によって構成される。ワクチンについての神話や誤情報が上記の2つの要素に強い影響を与える事実を考慮すると、動機づけにおける2つの要因の重要性は、誤情報がどれだけ「やっかい (sticky)」な問題になりうるかを明らかにしている。

実務上の問題

ワクチンを接種されたいという動機づけが実際のワクチン接種に結び付くのは、入手可能性やアクセス可能性、コスト等の実務上の問題が解決されている場合に限られる。実務上の問題の多くのは5章で扱ったが、行動メカニズムを通じてワクチン需要に影響を与え得るワクチン接種の諸要素について焦点を当てることには価値がある。こうした諸要素には、どこでワクチン接種が受けられるかなどにかかわる「ワクチンの入手可能性 (Vaccine availability)」、ワクチン接種にまつわる諸費用にかかわる「コスト (Cost)」、ワクチン接種可能な時間帯や待機時間などにかかわる「利便性 (Convenience)」、接種時の対応や接種後のケアといった要素にかかわる「サービスの質 (Service quality)」が含まれる。

ワクチン接種推進とワクチン忌避に対処するための戦略

ワクチン忌避に対する万能の解決策は存在しておらず、緻密なアプローチが、既存の健康格差に対処し、ワクチン接種を躊躇している人々がワクチン拒否に転じることを防ぐようになるための鍵となる。ワクチン忌避への対応を通じて公衆の信頼を得るためには、個別の集団のニーズや意見を考慮することが重要である。また、複数の文献レビューでは、ワクチン忌避への対応とワクチン接種の推進に関して、単一の戦略に基づく介入は、複数の戦略を含むものほど効果的ではないことが指摘されている。更に、ワクチン接種に対する考えや感情を修正することを目的とした介入に対して、直接的な行動変容を目的とした介入の方が、より効果的であることがわかっている。こうした行動に焦点を当てた戦略には、インセンティブやサンクション、要求（たとえば、入学の条件としてワクチン接種を要求すること）が含まれる。

ワクチン忌避に対処するための戦略として、WHO が議論したものの中には、地域社会の指導者の積極的関与や社会運動などが含まれるが、これらの戦術を組み合わせつつも、究極的には、ワクチン忌避への対応やワクチン接種の推進の取り組みは、「人々を中心に (people at the center)」据えることを強調すべきであるとされる。特に、対話に基づく介入 (社会

運動や地域社会の指導者とのかかわり等を含む) は、効果的であると強調されてきた。以上のほかにも、オピニオン・リーダーや著名人のワクチン接種、ソーシャル・マーケティングや行動経済学の知見を活かした介入もワクチン接種推進のための有望な戦略になりうる。

結論

ワープ・スピード作戦には、これまで100億ドル近くの予算が付与されており、ワクチンの配布と配送には更なる追加の資金が投入される予定である。公衆のワクチンの受容を確実にすることは、「最後の仕上げ (last mile)」に相当する決定的な課題である。なぜなら、ワクチン忌避への対応や信頼の回復に失敗すると、これまで投じられた資金全てが無駄に終わるからである。この最後の仕上げを完遂するには、COVID-19 ワクチンの公平な配分が現実のものとなるように、国や地域社会レベルでの追加のリソースと多大な努力が必要となるだろう。

提言 5 : COVID-19 ワクチンのプロモーション・キャンペーンを開発し開始せよ。

提言 6 : ワクチン接種の推進と受容に資する効果的な戦略のためのエビデンス・ベースを構築せよ。